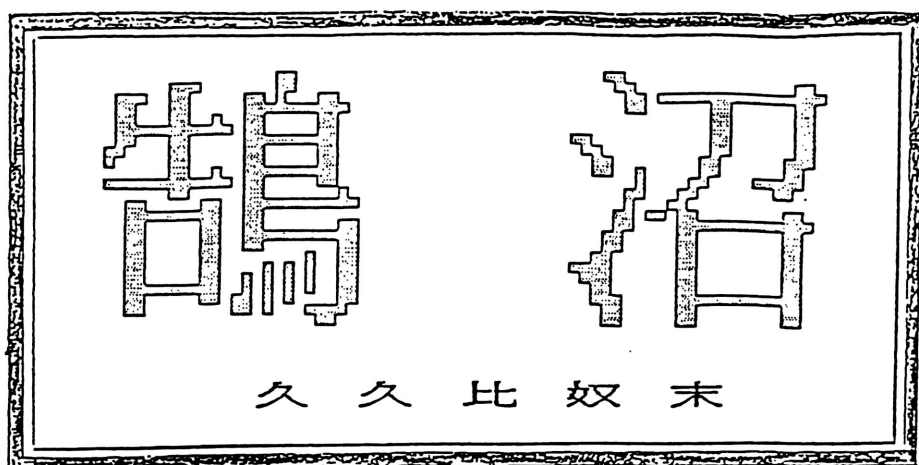




はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 4 1 号

1 9 8 8 年 3 月 8 日

鵜沼の老松に昔を語らせたら 齊藤功一

相州鵜沼邑文学 内藤千代子 塩沢 務

鵜沼を語る会

鶴沼の老松に昔を語らせた

齊 藤 功 一

私の同級生今井達夫君の鶴沼小学校時代の事である、見るからに都会育ちの坊ちゃんを、友達は好奇心からいろいろからかったが、私は決してその仲間にはいなかった。今井達夫君は明治42年の夏を両親と共に鶴沼「東屋旅館」の貸別荘で五才何ヶ月の子供のときだった。

達夫君の父親の療養のため、再び横浜から鶴沼の地え移ってきた。のは小学校3年生の秋、大正元年のことだった。それから大正12年の関東大地震の年まで12年間鶴沼の住人として成長していた。何しろ鶴沼小学校の当事は（寺小屋と称していた）。都会から移った家の子供が入学する事はごくまれな事だった、組の子供たちは珍しさも手伝って今の世で云ふ、イジメが始まった別に悪意はなかったが、何となく達夫君のおとなしそうなのが、イジメる悪がき達の気にいらないのだ、強そうな子供ばかりが組んで。今一度言ふが云うが私は決してその仲間に入らず、いつも弱い達夫君をかばってきた。或日こんな事もあった習字の時間の時「おまえ」生意気だ袴なぞはいて、「袴わな式の時だけはくものぞ」いきなり硯りの墨を袴に振り掛け「わあわあ」と手をたたき慶んでいる、その時ばかりは私も見かねて相手のやつらにくってかかった、今でも目にうかびます。今井君は鶴沼に来てからも度々家を替えました、今の鶴沼銀座昔は静かな処でした、私の店のすぐ裏側に住んで居た事もありました。時々遊びに行った事もあり。今井君のお母さんと云う方は大変静かなよい人でした。通学もよく一緒にいきました、私達の受け持ちの先生は小川桂助先生で週二回位？、話し方時間があり先生得意

の忠臣蔵の前原伊助の話で一同いつも楽しく面白くききました、その時今井君も教段え上り仲々上ずに話しをしてくれました、又時には野外スケッチやら砂山遊び等楽しい事はまだまだ色々ありました。とにかく今井君は頭が良かった。特に地理、読方、算術は最高のものでした。悪がき達もだんだん良い友達になつて、全学級の模範となる事にまでなつて来ました。当時は6年生を卒業すると中学校へ入学する子供が二、三人ありました、今井君もその一人で藤沢の藤嶺学園に入学しました。農家の子供たちは家業の手伝い皆それぞれの道を進んで行ったものです。

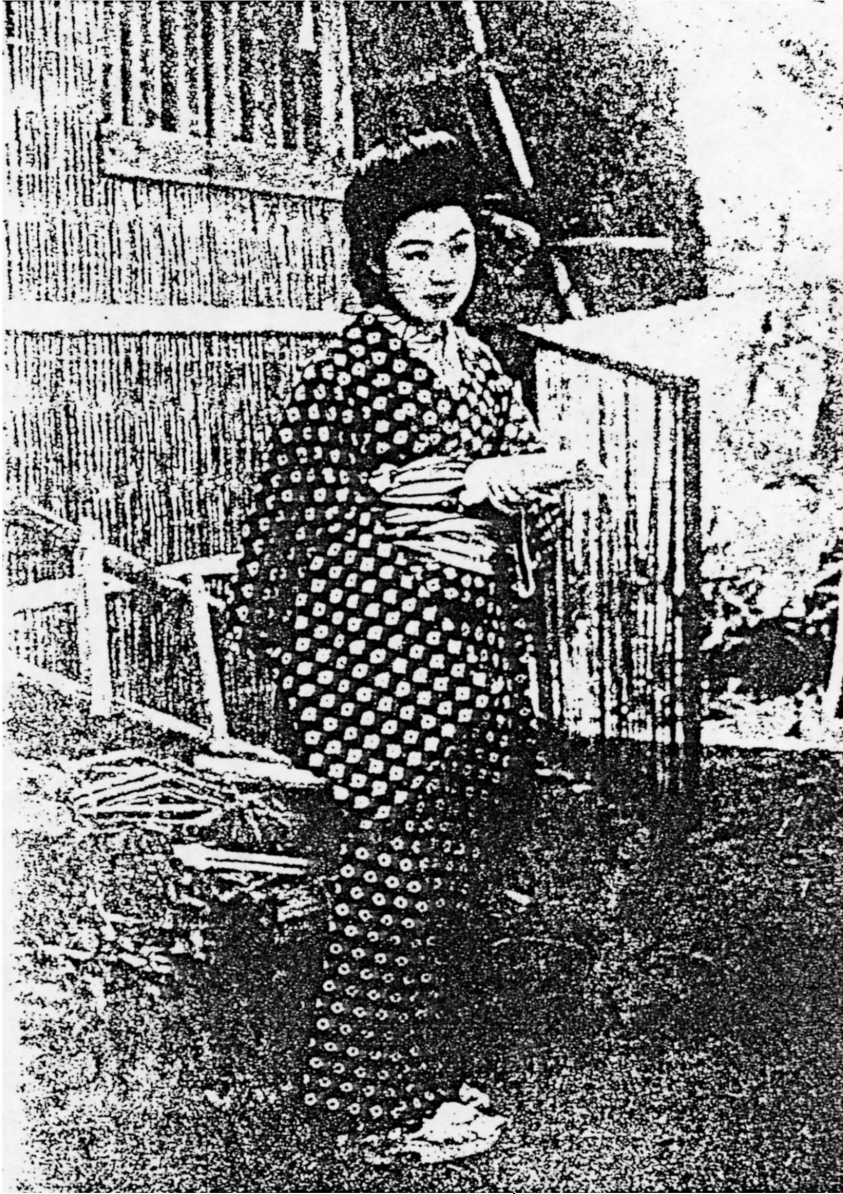
今健康でいる方は二三人位と思います、名前すら思い出しません今井君も健康でしたら有名な作家となっていた事でせう。

(元ライオン堂薬局御主人)

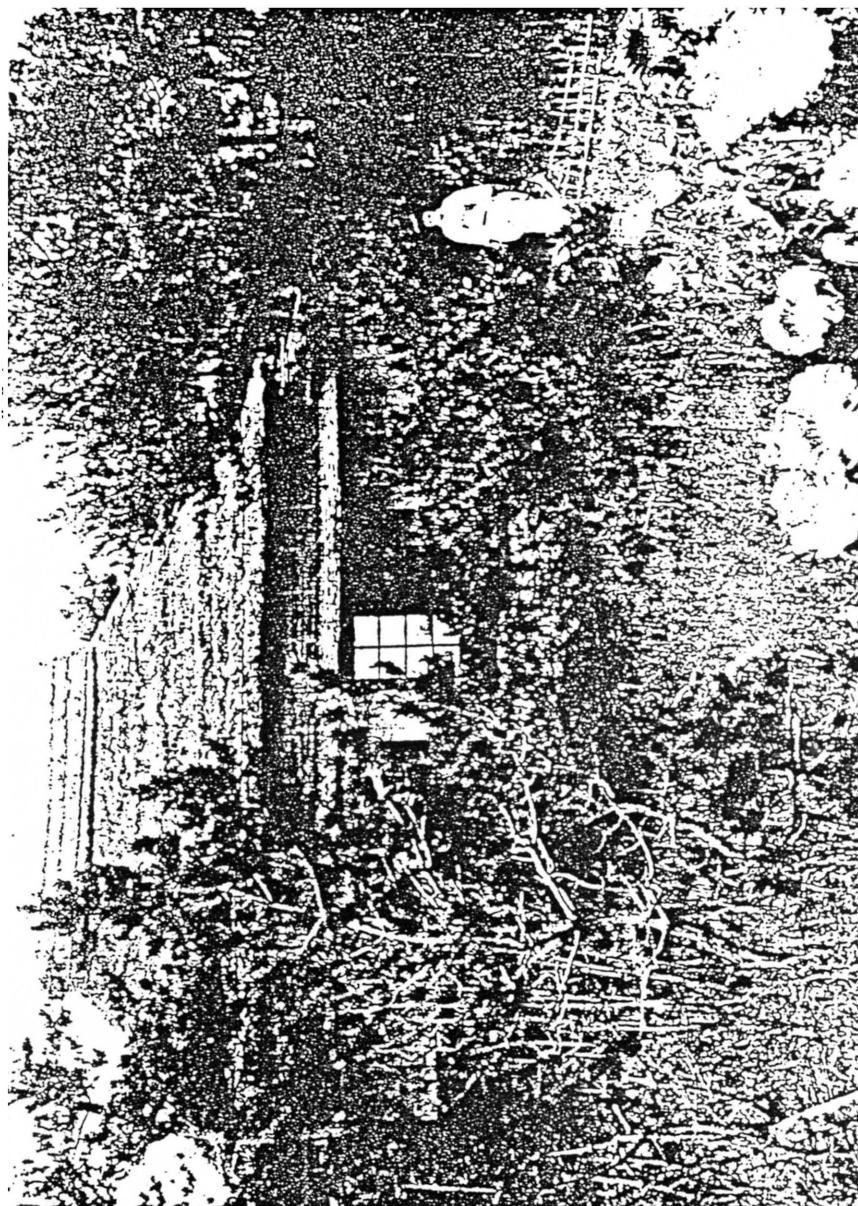
相
州
鵠
沼
邑
文
学

内
藤
千
代
子

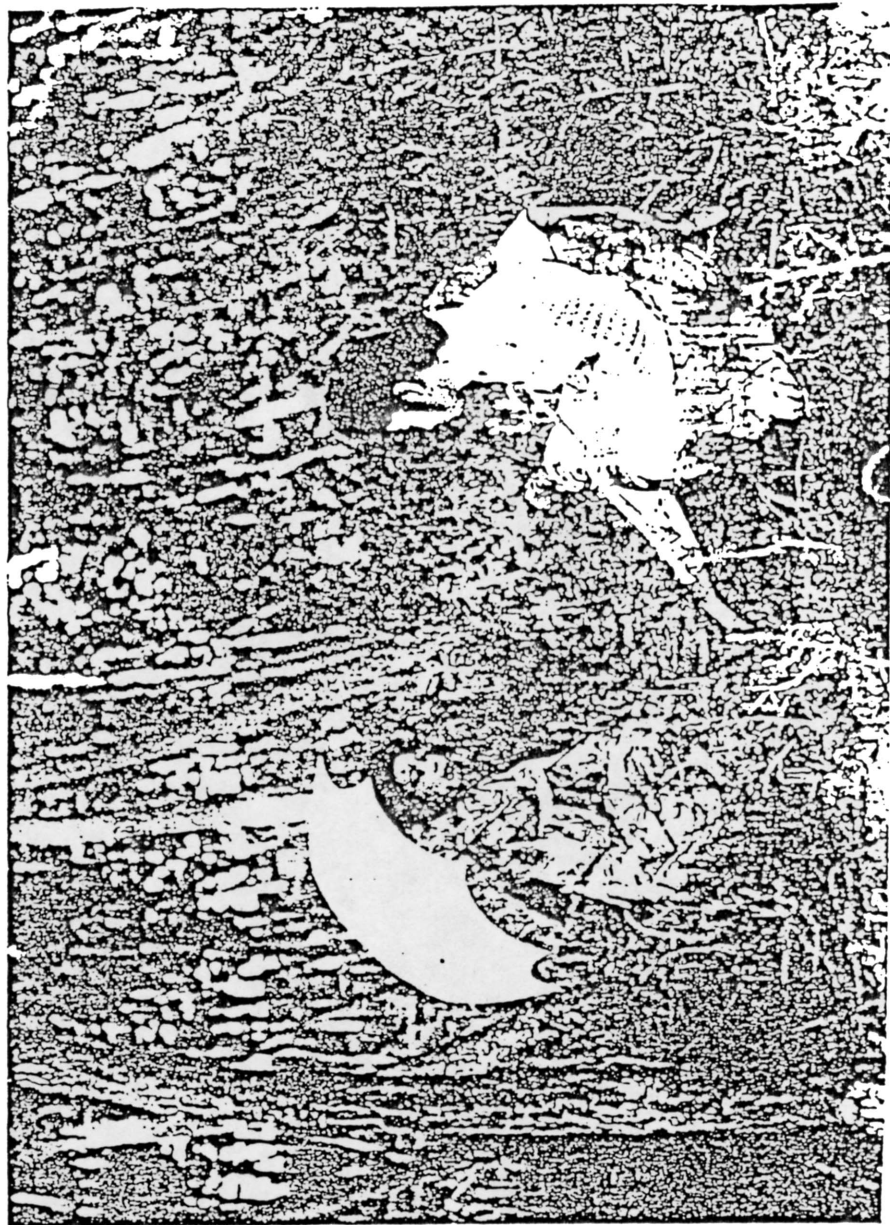
(一)



作家 内藤千代子



明治34年新築の二階家
鶴沼下岡6687番地



左が妹の鉦右千代子

入定 トッカ 天分五

説毒蛇

(二十三)

内藤千代

女

眼のよるころに玉とはよく云つたもの。
 自分のやうなものを取まいて 命がけの恋を
 する好奇な人間も一人ならずあるかと思へば
 世間は廣いと幸甚は内心苦笑した。
 幸甚はそんな事を聞かない以前から廣瀬を
 別に何處か嫌いと云ふのでは無いけれど

内藤千代子（鶴沼の女流作家）

塩沢 務

（１）千代子のあらまし

明治26,12,9 —大正14,3,23(1893—1925) 千代子の出生地は東京下谷西町三番地。父の名は「広蔵」会津藩士の孤児で陶画、象牙彫師で漢学者でもあった。母は「いく」旧幕の頃にはお金御用をつとめた家系の一人娘と生れた。千代子は四才のとき鶴沼に移り住み、父のもとで小説を読み、家庭教育をうけ、学校教育をうけなかった。雑誌の懸賞投稿に参加して三等に当選10円の賞金をうけた。『田舎住居の処女日記』M41,1』『スイトホーム』M44,9』『ホネームーン』M44,12,』『エンゲージ』T元,12,』『生い立ちの記』T,3,』『惜春譜』T4,6』『春雨』T,7,』『毒蛇』T8,10』『女学世界連載』T,6』『ああ青春』T,11,『冷炎』（京橋堂）等の作品をのこして33才の若さで春の淡雪のようにこの世をさった。

（２）鶴沼万福寺の過去帳と墓碑によれば。

「大正9年3月25日改葬す、東京根岸永称寺ヨリ」

釈乗願童子	明治22, 9, 19	広蔵長男義範2才
釈証界童子	明治27, 2, 7	広蔵次男敏雄4才
釈浄縁童子	明治28, 12, 17	広蔵三男 未名
深広院釋敬信居士	明治39, 7, 11	広蔵 49才
早春院釋智英童子	大正 7, 7, 11	千代長男 早春
松寿院釋貞信大姉	昭和 8, 10, 10	照子祖母

いく65才

秀文院繹妙顯大姉 大正 14, 3, 23 千代 33才

(俗名ノミ法名ナシ) 昭和 4, 4, 6 かめ 33才

繹尼貞照 昭和 23, 11, 18 照子 27才

内藤家の墓 火成岩製 重頭角柱の位牌型 塔身高64榧

(銘) (右側面)

釈 乗 願 童 子

釈 証 界 童 子

釈 淨 縁 童 子

(正面) 正面中央上方にサガリ藤の家紋

深広院繹敬信居士

松寿院繹貞信大姉 内藤 (基段前面)

早春院繹智英童子

(左側面)

秀文院繹妙顯大姉大正 14, 3, 23 俗名千代子

(裏面)

大正 8 年 月 日立之 施主内藤千代子

(遺族は横浜市磯子区に在住)

(3) 『鵠沼物語』湘南の作家たち 今井達夫 (抜粋)

●明治の末から大正時代のあの海岸町。そこには、まぎれもなく日本の芸術家たちの生春があった

「内藤千代は鵠沼に住んだ最初の女流作家であった。」鵠沼と私の結びつきは古く明治時代にはじまっていて、その明治42年の夏両親と共に東屋旅館内の貸し別荘ですごしている。5才何ヵ月の子供ころつまり



私も鵠沼住人第一期時代という、鵠沼と私との関係をここで説明させていただく。父の療養生活が目的で横浜から移って来たのは私が小学校3年生の秋。明治45年つまり大正元年であり。そして大正12年の関東震災までの12年間この海岸町の住人として成長した。それ以前の幼年期の夏1年だけ別の土地へ行っただけで、あとは全部鵠沼ですごしている。鵠沼という海岸町に関係のある作家画人たちを私の目がどのようにとらえたかその印象を伝えたい。第一期住人だった時代からその名前を取り上げれば次ぎの人たちである。徳富蘆花 武者小路実篤 内藤千代 里見惇、志賀直哉、碓伊之助、中村武羅夫、国木田虎雄、小島政二郎、井汲清治、沢木四方吉、長谷川路可、久米正雄、宇野浩二、江口喚、佐々木茂策、武林無想庵、島田清次郎、吉屋信子、岸田劉生、芥川龍之介 椿貞雄、横堀角次郎大変多彩な顔ぶれになる。

『回り道して覗いた内藤千代の家はいっもひどく静かだった』

海岸地区と本村と称する農村地区との差も、はっきりと区別することができる。農村地区に移住者たちの住居が建つようになったのは、昭和になってからといっても大きな誤りはない。海岸地区に大小の別荘が建ち並び旅館が出来てからも農村地区を本村と呼んで、土地の人たちは区別していた。その両者を区切る道を汐止（しおとめ）の通りと名付けた由来はわからないが、その道の本村側の大きな農家の離れで育ったのが女流作家の内藤千代である。かの女は父親の指導によって家庭教育を受け小学校へさえかよわなかったそうだが、理由は当時の小学校の程度が低かったのと同じく距離が遠すぎたからと思われる。私が文学少年になったころはほとんど筆をすてていたが、戦後かの女の娘さんが見

せてくれた博文館大橋新太郎と取交した出版契約書が、その流行作家ぶりを証明している。それは明治末期の日附になっているが、なんと印税1割2分と明記してあった。当時の出版事情を詳しく知らない私だが、これは異例とさえいえる厚遇ではあるまいか。←かの女が「女学世界」の流行作家であったことを母から聞かされた僕は好奇心をそそられ、時どきまわり道さえしてそっと覗きこんだものであった。その庭にはきしゃごで縁どられた紫陽花と撫子の花壇が、つつましく葉洩れ陽を受けていた。いつも、ひどく静かだった。そこの女主人の姿はしばしば道で見掛けた。いつも本を包んだらしい風呂敷包みを胸に抱いて、切長のすこし陰のある目の持主であった。> これは私の小学校時代の印象だが

(4)『生い立ちの記』(抜粋)注/送り仮名等は原文を尊重した。

□揺籃の地

初声をあげたのはやっぱり東京の真ん中で、4才までそこに育ちましたけれど、その頃の事は何にも覚えてをりません、2才の誕生日に撮った写真がありまますが、短いお河童の、頭大きい眼ばかり光った可愛くも何ともない児。引きずりそうな袂の着物着て、父さんのお膝に凭れかかって居りますの。兄三人も亡くした後の女の児だったので、随分大切にされたものなさうでした。(鶴沼にお引越)友達は一人もありませんでした、原中の一軒家で……で(原中は中原町現本鶴沼駅付近か?)父につれられて草花でも採りに出る外は、いつも母さんのお裁縫の傍で絵雙紙をひろげたり、お飯事の道具を並べたり、「しいばこめつかりこ、たあけこめつかりひ。」なんて探してあるきました。丁度自分の丈ほどの小松の中に「しばこ」つていふ暗紫色のひょろひょろしたのや「た

けこ」つていふ赤茶色の細かい茸やが沢山発生のです。期節は秋だった
のでせう。明けて暮れても別荘守の老夫婦の外には顔を合せる人もなく
て、四辺りと云えば白昼も狐の出さうな野原！何といふ佗しさしい静寂
な生活だったのでせう。都育ちのうら若い母は病身の夫と頑固な幼児
とを守って、毎日毎夜どんな気がしていたのでせう？一里も離れた鉄橋
を軋る汽車の音響が一番悲しかったと申してますの。髪に銀のやうな白
髪が目立って、渋紙色の額の皺も深うなつた此頃の母さんと、同人とは
どうしても思われませんわ。何かの御褒美にいただく五色の細かい金
米糖は硝子の壺に入つて、中二階の父さんのお机の傍らにありました、
いつしかそれを無断でつかみ出し、問ひつめられても頭ばかり振るやう
なこと、これらが浅ましい罪惡の最初だったのでせう。私は5才になりました。

□負けず嫌ひの本領発揮

どうした都合であつたか、本村の方の、とある農家の離家を借りて今
までの知人の別荘から引越しました。＜今井達夫氏によると汐止通りの
山口氏の離家（海岸7-21-10 山口文蔵氏宅当る）＞今度は近所に同じく
らいな児が沢山あつた、よく喧嘩はしました。その年夏から紅白ダンダ
ラの小さなメリヤス海水服を着て、毎日父に抱かれて海へ入ったもので
す6才の春、妹が生れた。ひの時分私は「鶴ちゃん」というお人形を大
切にしていたので、妹の名は「亀ちゃん」にして欲しい欲しいと前
からせがんでいました。生れた妹は観音様のやうな顔をした、色の白い
眉毛の半月の様な鼻の隆い、私とは似つかても似つかぬ気高い子でした
此のころ随分と悪戯をいろいろと覚えた、お転婆にもなつた、あの頃何

よりも恐かったのは「生肝取り」と「人さらい」で誰言ふとなく、子供達にお菓子を呉れてそれを食べると眠つてしまふのだ、云いました。夕方の「隠れ神様」で、夢中になつて遊び戯れていた子供たちが、褒のやみ仄闇にふと心づき、急におぢ氣立つて、「かくれ神様にさらはれる」とロ々に叫び乍ら散り散りになつて行く時の寂しさ、物悲しさといふものは幼な心にもまた格別なものでした。外祖母様を一番驚かせたのは、空荷車の後と先について「ぎいたんこ、ばったんこ」つて代わる代わるに上下するのです。梶棒の方へ行くと恐いほど高く上るので面白かつた。木登りを見付けられ慌てて飛び下りる機みに、片袖を枝へ引っ掛け引ちぎつてしまった。筍の皮へは紫蘇や梅干しを入れて貰つて、ちゅうちゅうと吸その他野ぐみでもつばなでも海老蔓でも桑の実でも何でも見あたり次第口に入れた、それに友達は何々に物置や木部屋の漬物樽から、梅干、ラッキョウ、紅漬の大根、はては糠味噌の古茄子まれ盗み出して来る、私も負けずにビスケットを缶ごと持出しみんなに振る舞つてやつた事もある。山へ行くと松の枝にこぶがあつて、そこから密のやうな甘い液の吹き出していることがありますの私達は争ふてそれを、枯松葉の先につけてなめました。「うちのお父さんのお国にはね、こんなのが大きいのが沢山あるんだって、それや大変よ、ダクダクと流れて流れてお茶碗で受ける位なんだって…」なんて、それ相当の法螺を吹くいた。皆は感歎の眼を光らせ乍ら、羨しさうに聞いていました。時々思いだしたやうにズルズルと、鼻汁やよだれをすすり上げつゝ。一時は南京珠が大流行で、指輪や腕輪や首飾りはおろか事、足首にまでまといつけ、南京珠を通すのには馬の尾が一番好いのです。欲しくつて欲しくつ

て堪まりませんが、何ぼ馬だつて尻尾の毛を引き抜かれるは痛うござんすから、蹄で大地を蹴って怒ります。でも懲りずに馬方の眼をぬすんでは、そっと四五人づつ忍んで行つたものでした。秋は雑木林へ椎の実や栗や初茸を拾ひに行くのも楽しみの一っなら、イナゴやバツタを串ざしにして炙ったり、小さな生蛙を見つけると松葉の針をお尻から突っとうして躍らせたり、子猫を川へ投り込んだり、随分惨忍な野蛮性を遺憾なく発揮しました。冬ざれの野にも山にも悪戯のたねがついて来るので、朝晩はきつと焚火をしますの。粃穀や枯草を集めて 男の児は後向きになって自分の裾を両手で持ち、はたはたと煽ぐのです。濡紙に包んだ鶏卵や甘薯や里芋が盛んにくべられる。皆が先へかわるがわる「美味、おいしい」つて汚ならしい、かけ鍋の中へ指を突ッ込んで食べました。菜っぱだの大根のしつぽだのお甘薯のくずだの、うらなりの唐茄子だのがググツト煮えていたのです。私にも、お食べ、もし夕云ふ事をきかなければもう遊んでやらないや、なんて口を揃へて云いました。仕方がないから私もその真似をするしかない、子守達はワツトときの声をあげたまま一散に我家へ馳せつけ「旦那、旦那千いちやんがいま豚の餌をぬすんで食ひなつた」と口々に告げました。まあ、私は父母からどんなに叱られましたろう、それからはもうあの子守達が憎くつてたまらず、外遊びはやめました。それを機会に~~手習い~~手習いを始めさせられました。父に手にをとりられて、いろはから教はりましたの。まだ机が高過ぎて困つて、台に腰をかけて致しました。その時分百人一首は暗誦してしまして来客でもあるとその面前でやらせられたものでした。いつの頃からかお清書に二重丸のついたのがあると、母にお手玉を一個づつこしらへて貰

ふ約束をした。かうして美しいお手玉は沢山たまりました。まだしても手鞠の方が巧者でした。ゴム鞠に毛糸で袋を編んでかぶせ、声張り上げて「源三梶原朝之助、おまへ御臣下まことかへ。まことどころかきいてくれ、雙六賭博に打負けて十兩峠で日が暮れて、小松原で夜が明けて、夜明烏に笑はれて、法印様から文が来た。その文は何の文ー」「信濃うの善光寺、あのせこのせやつこのせ。みきみいしやにせんくわうみいしやに帆う掛船が二丁うづく三丁うづく、とめたらわれらにごしよやあるぞ。ごしよいいらん、せんこしやいいらん。お月がでえやる、せんきちまんきちー」こんな文句がまだ長くつづくのですが、何だかさっぱり意味がわからない。ボンとつてはクルリとまはつて、またボンとつきクルリまはつたり、折り曲げ手の甲へのせてはすべらせるのは

おねんじょ様と

かうしんさまと

赤いボックリはいて

ボクボク十よ

だの

おねんじょ尻まくり

今度の番は

誰さんの番よ

何々さんの番よ

落すと恥よ

しっかりか、合うてんか。

承知なら渡そ

もし受け外せば罰として、お尻をまくられなければならないので、息を切って逃げまはつたりした。縁側だどつい鞠が逸し去りやすすいので雨の日でないかぎり地面をフッフッと吹いたり、袂で払うつたりしてそこへ座り込む。農家では、蓆を広げたり豆を打つたり粟を干したりするために、家の庭に黒土を入れ堅く砥の様に固めてあるので、子供衆の好い遊び場所でした。

□農村年中行事の一端

友達をよく誘い出しに来ましたが、それを断りでもしょうものなら、家の中の蛤ッ貝、外へ出れあ蜆ッ貝、千代バカダルマ、ダルマのくせに飴買に行つたらば、猫の糞ッ買つて来た、なんて口々にはやし立てる。実際は私は父母の監視の眼のとどく範囲内……方三四町の間を根拠地としていたので。かなり敵も多かつたので、家の近所を離れるのは恐いんです。ペイペイ言葉をつかふのが面白く、何か自慢らしいやうな気もしていつとはなしに、

おつたまげた（びっくりした）

のうこっちょい（憎らしい）

やいびなんねかよう（行きませんか）

けちィだ（嫌な）

すったばか（罵る意）

その他お錢のことをゼネだの髭のことをケバ、蛇のことをヘエビおやつのことをコヂハン（小昼飯）などと思はず口外へ飛び出します、ありせんとか尻上りな土音になつて了ふのですから仕方ありません。

年々避暑客の入り込むやうになつてから、農家にもハイカラ風がすつ

かり彌蔓いたしましたけれど、その時分はまだまだ生活程度もひくゝって今年30年ぶりで夜具の裏返しをしたのなんのつて、うそのやうな事実でしたわ、常食は七三ぐらいの麦飯、甘藷、いも団子、この団子は甘藷を薄く切つて日光に干し、からからに乾上つたのを搗臼で碎き、ひいて粉にして篩ひ上げたところは真白で、まるでうどん粉のやうですが、ふかすと蔭色にピカピカ光沢を帯びてきます。想像ほど美味しいものではありません。節句とか珍客だとかお振舞でもある時には、先づ第一にお蕎麦の御馳走！主婦が自慢の腕をふるひます。村の娘達が一番の快樂は何といつても鎮守様の夏祭礼と9月23日の藤沢遊行寺（演劇で有名な小栗判官照手姫の事蹟のある）の開山忌でせうね。打群れて見世物小屋の絵看板の前にさゝめいたり、うれしさに溶けそゝな相好をして一杯一錢の氷店や、一盆三錢の半五郎餅や、一串五厘の田楽やなどを、そのくせ恥かしそうに横ぐわえしてるのなどが幾組も見られます。つい大切な財布の底をはたかせられてしまうのは「ちょいちょいかいな」の店頭ださうでございます。「ちょいちょい買ひなよ、何でも買ひなよ、どれをとつても二錢と五厘だ。ちょいちょいかいなよ、やたらとかいなよ、よく見て買ひなよむしよと買ひなよ。人に相談はいらないことだよ」なんて、絶えず羽ばたきで品物払いて調子をとる乍らしやべりつゞけている。若い衆連はまた妙に鶏冠の様な刈方の頭髪をして得意になって、びらしやらと新銘仙なんかの単衣に白縮緬の兵古帯を腹いっぱい巻きなし、おろしたての白足袋ほこりで茶褐色にしてぞめて歩くのでございます。此村の雨乞の習慣は一寸面白うございます。蓆と青竹で大きな蛇の形をこしらへ、両眼は目簾に金紙を張ったもの、団子すくひってテニ

スのラケットニ以た様な格好のものが両耳、箕を二つ組み合わせて口になり、波団扇が舌、その中へ人が這いって何のことはない、丁度獅子舞のやうに踊り狂ひながら鎮守の社からねり出します。幾台かの荷車につけた鉦、笛、太鼓でビューーヒューテンテンドンドンチヤンチヤンチヤンチキ、耳も聳るばかりに囃し立てながら。道筋の家々では手ン手に手桶に水をくんで待っていて、蛇のあたまから浴びせかけます。しまひにや海中へ入って散々暴れて流してしまふのですが、ほんとうに霊験のあったものかどうか覚えていません。1月14日には何処の家でも川柳の木を切って来て臼に結びつけ、枝に紅白の餅花や蜜柑をいっぱい飾って土間の中央へ安置する。ゆらゆらとしだれかゝったその美しさといふものは……これは針供養などと同じく、臼の慰勞祭とでもいふ意味であるらしい。堅くなつてひびわれた餅花なんぞ（米の粉でこしらへた繭玉ほどの小さなお団子）美味くも何ともありやしないけれど、囲炉裡中へくべて、熱いのを掌へ転がしながら灰を吹き吹き家囃ぢつた味は忘れられませんのね。

16日の夕方は各自五色の色紙をつぎ合わせたのへ「奉納道祖神」女の子なら「道祖神」と書いたのを笹竹の先へつけ、辻の道祖神の前へ集つて大騒ぎをします。それはこの夕べ、門松を焼き捨てる「斉取」の火で燃やすのですがひらひらと燃殻の空高う舞い上って行く程、その人の手蹟が上達するといふ伝説なのでした。初午の日は男の児達の天下で、稲荷の社は村の豪家の椿の真紅に咲いてる家の庭にあつた。私のつれられて行った時社のまはりには人雪崩を打つていた。一袋の駄菓子と赤の御飯の大きなお握飯、どんな手で握つたらうかと思はれる、両手に受けて

もまだ食み出していた。こんな物貰つちやつてどうしようと気が気ではなく、我家へ帰つて叱られるのが恐さに、ひそかに藪の中へ投げ込んで了った。（これが非常の罪惡でもおかしたやうでその後その藪蔭を通る度に、そっとのぞいてみた）夜はお神楽があつて、中には重箱、お弁当なんぞ背負込んで遠路を出かけて来た人もあつた。

□ 吟子姉様と手風琴

20日あまりを一年に数へる私は、八才でなければ学校へ上れませんでした。が、その頃まではもう二年生の課程を優にをさめてしまつたのです。父は切角これまで丹精したものを手放すのが惜しいのと、一つは小学校が遠い所…半里も先にあって、雪の日や雨風の登校が気づかはれたのと、私が世間見ずの利かん坊で、容赦なく誰とでも喧嘩するのとで子に甘い父母の取越苦労から、私はとうとう父の膝下を放れませんでした。父は象牙の彫刻師でしたから、気さへ向けば朝から晩まで仕事台に向っているのです。私も傍に机を並べて終日坐り込んで居りました。一寸でも外へ遊びに出ると非常に淋しがつて直ぐ呼び戻されるので、私は減多に二階を下りない子となつてしまひました。室内の娯楽ばかりを求めるやうになり、幼年世界や小波小父さんの日本お伽噺にも飽いてしまつて、その頃父の暮敵の小野さんというお家に、吟子さんて17才ばかりの綺麗なお嬢さんがありました。しとやかな中にも凜として、細面の品のいいのに、桃割や唐人髷のよく似合ふ——そのくせまだ女学校気堅の失せきらぬハイカラな、お嬢さんに唱歌を教へて戴くことになりましたの、父が願ひして。吟子さんの弾く手風己琴に合わせて「からす、からす、かんざぶろ」だの「えのころ来い来い、」なんて歌はせら

れますのが馬鹿らしくてたまらず、何と賺かされても叱られても一向口を開かないものですから、吟子さんにもてあまされてしまひ、とても駄目でせうと父に訴へられまして、私は音痴だといふことに家内中から定められて了ひました。早く別れる故だったせうか、父は無暗と前途を急いで、理解も出来ぬ私の頭脳にいろいろな事を詰め込もうとする。私がまた早飲込みの早忘れで、教へられた事は苦もなくすらすらと覚えてしまふ代り、その忘れぼい事、右の耳から左の耳へ行き抜けなので。そろそろこの家庭教育を苦痛なものと呪ふやうになった。のんきさうに学校へ通ふ小女達が羨ましくってたまりませんでした。学課の好き嫌ひが甚だしくなつて、算盤の音などきくと身の縮むやうでした。だって相場割なんぞやらせられるんですもの、何の事か無我夢中でしたわ。

□ 悲しきあきらめ

生ひ立ちの記の続きをと強いられるので、再び筆を執つては見ましたものゝ、おゝ涙！珍しい涙がポタポタと、原稿紙の上に散りました。

前に書いた記はあれは嘘ではございませんけれど、みにくいしんの上に五色の彩糸を加へて、絡り上げたのでございます。何の私の生い立ちがあのように平和な、美しいものでありませうぞ。それを悲しいとも不幸とも思ひはしませぬけれど……けど云ひたくない、云いたくない、沈黙は黄金でございます。偽らぬ懺悔する程のわるい事は致しませぬが―自伝―を書いておいたなら、死んでから心残りがなかろうとも思ひますけれど、こんな者かと見透かされ、さげすまれて了ふのも残念でございます。散々怪しませておいて、平気で嘲笑してやろうといふ人のわるいいたづらッ見なんでございます。清溜併せのんで底知れぬ海洋の様な、

深さと広さがもちたいのでございます。今はこんなに住み荒れてしまっ
て見る影はございませんけれど……此家の普請の出来上つて引うつつて
まいりましたのは、私が九才の夏のこと。生て始めて自分の家といふも
のに入つたのですから、子供心にもその嬉しさは格別でございましたわ
新築の木の香心地よく、青畳はつるつると滑りさう。何しろ別荘地のこ
とですから、近隣の様子やお交際する人たちなども、今までとは全然ち
がひました。言葉使ひやお叩頭の仕方などについて、やかましく云われ
出したのもこの頃の事です。＜松が岡3-15＞ よくお使いに行つた帰途
など、学校がへりの子供等に逢いますと、紫メリンスノ風呂敷を腰に巻
いて袴のつもり、書物の代りにお重箱包みなど斜かひに背負つて自分も
そのお仲間らしく見られることに苦心もしたのでございます。

かうして心のうちは燃ゆる様な不平や嫉妬や羨望やの念に駆られなが
らも……、何一つ口に出しては云ひ得もせず、悲しいあきらめに生きて
いた自分が、可哀想でならないのでございます。子供らしくもない、何
故母の背に鍵つて駄々をこねなかつたか、無理を云って困らせなかつた
か？この子はまるで男児の様な、さっぱりとして何一つ、女の子らしい
ものを欲しがった事がないなど、父母の寝物語りをきく度搔卷の襟に顔
おしあて、泣いていた子を唯が知りませう、そのくせメソメソする事な
んかは大嫌ひで、女らしくないと云はれるのをむしろいい機会に、随分
はねまわつた。世話もやかせず、居るかいなかわからないほど温和し
くて、ゴムの乳首を大きなりしていつまでもチウチウ吸ってた妹は、人
なつつこい愛想のよい、冠切りのふさふさと色の白い、誰にでも愛せら
れる子でした。

□ 初めて文学に志す

あの頃の女学世界……御記憶の方もありませう、現今とはちがつてもつと世帯じみたぢみな雑誌でしたわね……それがたしか四月の増刊に、「閨秀文壇」で大層華やか号の出たことを。懸賞小説、和歌、新体詩、美文、韻文こきまぜて、百花綾乱の趣があつた。熱しやすい少女の憧憬の瞳はヒタと誌上に吸ひつけられて、みるみる美しく輝き出しました。筆者の名も題忘れましたが、何でもその中に非常に婦人に文学を推奨したものがあつたと思ひます「天才は望んで得べきものでなく、待つて来るべきものでなく、その記るや百年に一人のみと申しますなれど、その一人にならうと我から震ひ立つも面白いではございませんか… 語を寄す、天下の女学生諸君、卿等の中に我こそ一つ文壇の女將軍たらんと思し召す方はなきや、我こそ月桂冠を得んと志すお方はございませんか。よしや第一流の境には至れぬまでも云々…殿方もまた大早に雲霓を見るの思いで、屹度双手を挙げて歡迎なさるに相違ありません。」

こんな文句があつたと覚えて居ります。飽かずに繰り返したものでした。これによって樋口一葉女子だの三宅花圃女子、若松賤子さん、薄氷、稲船なんと云ふ方たちの名も覚えしました。あの時代の雑誌の感化力なんて恐ろしいやうですね。ところが父はあくまで厳格な疍癖家で、数学的な頭脳を有った人でした。時には冷酷かと疑はれるほど。

一例をあげれば私の作文なんかでも、あまり誇大な形容詩や奇抜な擬人法など用いると、ひどく叱られた位で、文学なんていふものの意義や価値はもとより、存在すらみとめてはいなかった。私は自分が新領土の発見でもしたやうに思って「女でも立派なものになれない事はない、か

ういふ道がひらけている」と云ふことを、ぬすんででも行かれてはならないと黙って胸一つに秘めていました。その後は紙を嚼むやうな漢籍の素読なんぞ教はりながら、指はパチパチと算盤の面をすべりながら、手習の筆を運ばせながら、私の心はそこにはない。果たしもない空想の幻を追ふていたのでありました。さまざまな理想の人物を胸に描いて理想の生活をさせて、それを何よりの楽しみとするやうになった。物事が手につかず、妹をうるさがったり、うつけたもののやうに茫としてゐる事が多く、いくら叱られても直らないので、つひには雑誌も新聞も取り上げられて了ひました。それまではどちらかと云へ、ばお父さん子なのでしたが、自分を解してくれない父は、もう今までの様にへだてなく甘へられる、ともすれば襟かみしめて、火の様な非憤の涙をホロリホロリこぼしたものでした。便所や物置の中にひそんで、読書の禁ををかしたのが知れて、手酷く折檻せられた事もありましたけれど、体罰ぐらいが利くやうな年令でもありませんではたし、拳固は一時的だからいくら痛くてもかまわないけれど、お灸が一番いやだつたのです。今でも襟首に痕が残っています。父さんはお前に対して何も望まない。身体さえ壮健であつてくれれば、それが一番親への孝行である。だからもう勉強なんぞしなくてもよろしい、しばらく文字に遠ざかれ！ 限り知られぬ悲痛の響きがこもっていた。父は秀才と云はれた自分の末路が、かわいそうでならないのでございました。藩の学校時代には、月の桂もと郷党から望みを囑されたものが、云ひ甲斐もないこの有様、それも病弱な体質故と、子供たちは愚鈍でも丈夫でなくちや、とはその口癖でございました。幼い時から私の頬には紅味の薄いのを気にしていましたが、妹はその反対な

ので「林檎ちゃん林檎ちゃん」で愛しました。

□ 友のゆくえ

私は裁縫の稽古に通ひ始めました、ここにはお弟子が三十人あまりいました。私はそれまで全然針なんてもったことないので、花雑巾や糠袋から習ひ始めました。生来の勝気はかげをひそめて、その頃は少し放心の体なのでした。何云はれても唯、彼方お向き、はい、此方お向き、はい、といふ調子で、一番年下ではありましたが、物の数にも数へられはしなかったが、馴るるにつれて打解けたお友達も出来、お弁当のおかずを取かへっこしたり、ひそひそ話の仲間にも入れられるやうになりますと、面白くって毎朝いそいそと、出掛ける時間が待たれました。が、毎日の往復、村の悪たれっ児たちに、いぢめられるには閉口しました。どういふわけだか知らないけど「花車の人形、花車の人形」ってはやし立てるんですの。そうして長い長い竹竿をふりまはしたり、古草履を打つてたり、砂蹴浴びせたり、皆で通せん坊してしまったり…田舎の人って不親切なもので、自分の子達がそんな悪戯して困らせてるのをみても、決して叱らうとはせず、かへって笑ってるんですもの。よくみんなしてお嫁どりを見に行きましたっけ、当地の習慣で当夜はお座敷の障子も何も全部開放して、自由に式場の光景を見物させます。むしろ観客の多いのを名譽とするので、もし雨戸でも閉めてしまうものなら、乱暴されて大変な騒ぎ！そうして近隣の若者連中へは御祝儀として酒肴を贈るのださうで、その厚薄多少により、聞くにたえぬやうなことを云って野次るのです嫁ぐ時大抵なことでは俵を用いません。もつとも当日は「迎え新客と」云って、婿君が角樽や鉄箱かつがせて先方の仲人、重立った親類

一同、此方へ迎ひに来て一渡り酒宴のあった後、さて連れ立って出掛けるのです。（婿取りならば女の方から迎ひに行きます。）先方の家ではたいまつを焚いて待ちかまへていまして、花嫁さんの門口を這入る時、菓の束ねたのでお尻を叩きます。式の最初に花嫁さんには「おちつき牡丹餅」と云って塩黄粉のお萩を食べさせる。これは良人を甘くみぬようにといふいしめですとか、お吸い物の変わる度、花嫁さんの服装も替わります。ありったけの着物を着替へては出、着替へては出、席のあたたまる暇もなく、お開きは暁の二時過ぎになるさうです。婿君はじめ男の人は袴のままでみんなあぐらよ。翌日はお近づきにまはります。丸鬘に袖小紋ぐらいなさだ過ぎたのでも、必ず角かくしをかけることと、扱帯を下げることと洋傘をさすことが、花嫁さんの表章なのでございます。お茶を一つまみづつ御祝儀袋に入れたのに、名前をかいて配ります児童たちは後からぞろぞろ尾いて歩いて「嫁御の股に、ねぶとが出来て」なんて口々にはやし立てる。私たちのお裁縫場は二階建てで四辺はすっかり青麦と菜の花畑でございました。その中の細道を緋の覆をした鉄箱や、紫の深張や、桃色の扱帯などの一行の練り行くさまが、まるで絵のやうで、それをみるため裁板を踏み越え、針箱を蹴飛ばし、窓のところへ重なり合ってワイワイ騒ぎましたが、お嫁入のお支度は何でも新調の、シツケのかかったものでなければ幅が利かないので、それまでは不自由を忍んで我慢して、いざといふ時一時にこしらへます。

その代り嫁った先では、知己近隣がお支度拝見に寄り集ひます。と、もう長持の底から下駄箱の中まで御披露いたします。紋附が幾重、丸帯が何本、羽織が何枚、銘仙が幾通りなどとはおろかな事、足袋が何足、

たすきが幾筋、手拭が何十本、襦袢、お腰巻の数までがそれからそれへと喧伝されますの。かうした取沙汰や誇りの中に、お白粉つけて紅さして髪も美しく結い「嫁っ子」らしく裾の長い着物でも着ていられるのは、せいぜい二月ぐらいの間でありませう。農事の方でもいそがしくなれば、いつか日焼に色も黒み、手足もあれ、そそけ髪つくろふ暇もなく、切角都会への御奉公で、きたへ上げた都言葉や、お行儀ぶりも乱れ、見る影もなくくすぶり返つて了ふのです。その頃の友の多くは次々に、みんなさうなりました。今では道で行き合つてもわらず過ごしてしまひます、お互に。

□ 父を山寺の火葬場に送りて

父に逝かれたのはその年の七月でした。まるで夢の様な儚ない別れでした。その時の有様は……もう、もう、云ふに忍びません。群り寄る蚊軍のうなりも凄まじう、薄暗にふらふらと、沢山な月見草のゆらめいている夕間暮……。人は大勢集りました、身のおきどころもなくして私は、戸棚の中に一人かくれて塞き上ぐる声をのみました。心強い児、涙一滴こぼさぬ、と憎んだ人もありました。今から思えばその口を引裂いてやりたかった。けれど物も覚えぬとはあの事でございませう、ただただ寝たらぬ時の様に茫とした頭脳は……翌朝夜の美しう明け放たれたのが、不思議な様に思はれました。あのむし暑い息苦しい、忌まはしいランプの焰の赤黒くただれた夜るの空気は、私たちの気分にあふさわしいものであったのに……。田舎寺の火葬場は、後方の山の上に形ばかりのものでございました。もう暮れ切って四辺は真暗な中に……伯父の手にもち添へられて、たいまつからうつした焰が、ちらちらと寝棺のまはりに

紅い舌を吐きはじめた。でもこの時は暮れまどふ心の中にも、同じ煙に
などとはかけても思ひはしませんでした。あきらめ、といふ言葉はいつ
の場合にも悲しいものでございますけれど……そしてあきらめきれきい
事が多いのですけれど……この事ばかりはあきらめる事が出来たのでご
ざいます。かねがね云ひ聞かされていた言葉の故もありませう、所詮は
かくとかねて悟したる事なれば……その臨終こそ急なもので、何一ッ遺
言らしいことを残されるまでもございせんでした。火葬場からの帰
途、私は妹を抱いて俥に乗せられました。ばらばら落ちる木下闇の雫……
…雨のびしょびしょ振る晩なのでした、正体もなく寝入りってしまった
妹は、私の腕の上に頭をごろごろさせていて、いくらゆすぶってもゆす
ぶっても起きません。あをいあをい螢がふらふらと田圃から飛んできて
行途を掠めた。その気味の悪かったこと。お察し下さいまし、父亡き
後の一か一家は……まるで火の消えた様なものですわ、寂しさ、詫びし
さ、物悲しさ、心細さをとりあつめて。かうなればまづ第一に生活上の
心配からせねばなりません。母の実家の当主は、私達にとって血統を分
けた叔父ではありませんが、俠気のある人だものですからその好意によ
って、兎も角も一時は弥縫することが出来ました。薄命とは云っても母
子三人散りぢりにもならず、父様のおかたみの家も手放さず、他人交ぜ
ずにかうしていらればと、儚ない事を頼もしがって……あゝ薄氷を踏
むやうな思ひだったあの頃……月末になると勝手口の障子の開く音に胸轟
かせたり、副食物の不平なんぞ云ひかけてふと心づいて、口をつぐんで
しまったこともあり、妹はその年の9月から村の小学校の尋常科へ入学
させました。一番上の兄が生きていれば、20才にもなるものを……。

□ 東京見物の追憶

明治40年、上野に博覧会開会されました、我が故郷とわいへ、私のはっきりと物心ついてから上京したのは、7才のお祝ひの時、産土様の下谷神社へ参詣の為めと、その次ぎは12の春、外祖父様の御法要で外祖母様がお迎ひにいらしてつれて行かれた、それっきりでした。

鉄道馬車のお馬が黒い眼隠しされているのは、不思議で不思議でたまりません出した。そして乾いた馬糞のほこりと共に、ぱっと風につれて舞ひ上るのを、子供心にも汚いと思った。赤い大きな観音堂の回廊の欄干につかまって、もつと鳩ボッポニ豆をやるのだと駄々をこねながら、心の中では「まわり燈籠ンなあれ、赤い衣服着せて、観音様へつれてくぞ！」とよく丹波鬼灯をもみながらうたふ唄のことを考へていました。玉乗ではあの可愛い幼い太夫さん達がクルクルと巧みに玉に乗ってまはるのが面白さうで羨ましくってたまらず、真似をするとてゴム毬を幾個踏みつぶして仕舞ったか知れません。12才の時は陽春4月、上野の山は桜花と人ともに埋もれて居りました。毎日々々足がすり古木になるほど諸方見物につれて歩かれました。だいじな下着の緋無垢の裾はすっかり切れて綿が出てしまった。またこの時ほど研究心の盛んだった時代はございません。博物館などへ這入らうものなら、一々根が生えてしまっかなか動かないので、これには外祖母様も閉口していらした。

白木屋の飾窓の活人形の美しさに、口開いて見惚れてしまったり、日本橋の小母さんそこへ泊ったら、その翌朝花いかだをつかって、念入りのお化粧してくれたので、顔がびりびりして困ったり、朝御飯の味噌汁の実がお甘藷で大変美味かったけれど、我家でないのだから遠慮してい

ました。よそのお家では御飯のお代りをする間、お箸をもって待つているものぢやない、ちゃんとお膝に手をおいているのですよ、と外祖母さんに言いきかせられ、ひとり非常に赤面した事を覚えて居ります。

□ 初島田の印象

その次ぎが明治40年の博覧会见物なのでせう。その頃からの思いでいろいろと多くなって、滞在10日あまりのその時の日誌が二冊の雑記帳に細かく記してありましたけれど、何処へ失してしまったんでせう？

髪だってそれまではまだ鬢髻分けて結ったことはないんでしたのに、一足飛びにね、叔母と髪結さんにすすめられるまま否とも思はず、鏡台の前でされる通りになつてますとね、やがて出来上った髪は文金高髻でしたの。よく皆さんが絵や詩になさる初島田の印象も何もあったものではありません。重いとも恥ずかしいとも何とも感じゃしなかったのも、むしろ無茶でしたわ、数への15才でしたもの。今こそこんな末細ってしまった髪も、其自分は坐れば裾に二寸もたまつて、片手には握りあまる見事さ！根には白丈長を巻きましたが、まだ幼いのだからといって、上には紅いちんころがけを掛けました。この頃復活してきた結綿や、銀のびらびらや薬玉簪や摘み細工の前挿しなんて花やかな物は、影も形もひそめていた時代ですから、派手にしてせいぜい平打の大きいのが、朱塗蒔絵の櫛ぐらい。服装はといへば黒襦子の襟のかかった黄縞の銘仙に、浅黄襦子と板締縮緬の腹合せ帯、友禅縮緬の前掛つていふ純然たる町娘の風でした、母の好みでした。

□ かるたのまとひ

母の譲りの小紋縮緬を抜染にしたりなんかして、私は16才の春を迎

へました。　そのお正月は随分かるた会で騒ぎました、田口さんといふお宅で毎晩々々12時過ぎまで。此家には東京の学生さんが沢山来て居られましたので、田舎少女の私が生意気にも学生界のいろいろな事を知りましたのは、みんなこの人たちによってでした。昼間はともあれ夜分の外出は、母がなかなか許してくれませんので、涙をのんで黙したことも一度や二度ではありませんでした、どうでもなくてはならない花武者（？）と先方からはもう櫛の歯をひく様なお迎ひなんせう。得意の絶頂はこのときでしたね、ホ、ホ、ホ、ホ。　そのくせ場なれない椋鳥サン、わなわなと胴震ひがついてしまって、口も利かれず、札など揃へやうとしても、まるで身に魂が添つちやいません。頬は火照る、耳は高鳴る、湧き立つ胸をおさへて、顔も得上げず居りました。　田口さんの和さんは、都育ちの繊細立ちな品のいい、ほんとにお嬢さんらしい美しい方でした。私とは同じ裁縫のお師匠さんへ通つて、お酒徳利のやうにいつも一緒だったお優ちやんも、小学校時代から小町娘と謳はれた程の縹緞よし。私瘦せてて色が黒くて眼ばかり光って、派手な紫友禅の羽織など少しも似合はない、黒ン坊の申し子みたいでしたわ。村一番とて高の知れた髪結ながら髪は二人とも挑み合つての高島田。元禄風ってイヤに前髪を巾広に、ぐいとおしつぶして出したのが流行る時分で、今からおもえば随分いやな恰好ですことね、一つ年上でしたけれど小柄な若々しい和さんは、お下髪がお好きで、ふつくりと前髪出して、それがどんなに羨しかったでせう。　かるたにも飽きると今度はお茶坊主だの、ごろごろ様だの家族合わせだのパン食ひ競争だの、随分子供らしい遊びに笑い興じた。唯さまの磯節うたうお声の美しさが身に沁みて忘れなかったこ

とみんな懐かしい追懐のたねでございます。

□ 次回は『晴の飛躍の初舞台』

編輯後記

内藤千代子作品製作にあたり、鵜沼神明万福寺荒木住職の御協力を賜り有り難うございました。本文漢字は訓読みでありますので舊漢字等を使用しました、漢和事典などで昔を楽しみながらお読み下さい。

『 鵠 沼 』昭和 6 3 年 4 1 号
昭和 6 3 年 3 月 8 日 発 行

鵠沼の老松に昔を語らせたら

著 者 齊藤 功一
内藤 千代子 著 者 塩沢 務

発 行 所 鵠沼公民館

藤沢市鵠沼海岸 2 - 1 0 - 3 4

電 話 3 3 - 2 0 0 1

編 集 鵠沼を語る会 塩沢 務

藤沢市鵠沼海岸 3 - 1 2 - 3 3

電 話 3 6 - 7 8 7 6